

二〇二〇年七月三十一日

置き物にあらず五郎助首回す  
梅雨明けて四更に照らす十日月  
コロナ禍の鈴緒に触れず夏詣で  
林道の古りしバス停蟬しぐれ  
雷鳴や小手一閃の小剣士  
百歳を目途の余生合歓の花  
青鷺の首潜望鏡めく田んぼ

二〇二〇年七月三〇日

峰雲の沖へ真向きて師弟句碑  
餌を垂るる波紋は闇に夜釣舟  
歟休め腰をのばせば鰯雲  
せせらぎに洗ふ絵筆や山薊

二〇二〇年七月二十九日

かき氷をんなの愚痴に山崩れ  
梅雨晴間刻を惜しみて夜鳴き蟬  
雨晴れて待つてましたと蟬時雨  
蠟石の落書き消して夕立過ぐ  
添ひ寝せし児に起こさるる昼寢覚

二〇二〇年七月二十八日

マルクスも紙魚の住処となりけり  
曖昧な空に兼用日傘かな  
ご神木大緑陰をなせりけり  
エアコンの音うとましき熱帯夜

音吉

はく子

ぼんこ

智恵子

素秀

宏虎

明日香

やよい

素秀

みきお

智恵子

もところ

智恵子

満天

素秀

なつき

もところ

たか子

はく子

菜々

二〇二〇年七月二十七日

烏帽子岩目指し遠泳浜の子ら  
蟬の楽フォルティッシモとなりて急  
逃げる背に命中したる水鉄砲  
熱帯夜しきりに鯉の跳ねる音  
夏草の径を塞ぎて雨に伏す  
蚊遣香焚きて古民家カフェーよし

二〇二〇年七月二十六日

そつぽ向くひと叢のあり日輪草  
畑隅に並ぶうらなり西瓜かな  
ひぐらしの声に明けゆく山の朝

二〇二〇年七月二十五日

墨痕のみことば涼しミニチャペル  
地藏堂手を合わせれば蟬の声  
清書きの半紙に汗の一雫  
ふしくれの指躍如たる祭笛

智恵子

せいじ

なつき

かかし

三刀

こすもす

たか子

なつき

みきお

せいじ

こすもす

せいじ

みきお

毎日句会みのる選・二〇二〇年八月二日